

変貌するアフリカ・中東の食料需給

— 高まる食料の輸入依存度 —

基礎研究部副部長 清水徹朗

〔要 旨〕

- 1 アフリカの人口は10.3億人であるが、面積が広大であるため人口密度は低い。気候は多様であり53の国がある。アフリカ経済は90年代まで長期にわたり遅滞していたが、2000年頃より回復に転じている。中東は世界史の重要な舞台となった地域であるが、今日では石油資源が重要である。
- 2 アフリカの人口は急速に増加しており、内戦や干ばつにより食料難がたびたび発生してきた。アフリカの穀物の生産量は増加したが、人口増加に追いつかず、穀物輸入量も増大した。ただし、アフリカの食料においてイモ類が重要である。中東の人口も大きく増加し、穀物生産量、穀物輸入量とも増加した。
- 3 アフリカでは、耕地面積が増加し穀物の生産量も増加したが、単収は低い。生産量は、トウモロコシが最大である。中東でも穀物生産量が増加したが、主に単収の増加によるものである。トルコ、イランのみで中東の穀物生産量の76%を占めている。
- 4 人口増加、飼料需要の増大、都市化の進展により、アフリカ、中東では穀物の輸入量が大きく増加しており、世界の穀物貿易に占めるアフリカの割合は17.3%、中東の割合は16.1%になっている。イモ類の貿易量は少ない。
- 5 ナイジェリアはアフリカ最大の人口を有し、穀物、イモ類の生産量はアフリカ最大であるが、国内で不足している小麦、米を輸入している。エジプトはナイル川の水を利用した農業が盛んであり、穀物生産量は北アフリカで最大であるが、小麦、トウモロコシを多く輸入している。サウジアラビアは、80年代より地下水を汲み上げて砂漠を小麦畑にしてきたが、水資源の枯渇が問題になったため、2016年までに小麦生産を中止することを決定し、穀物輸入量が増加している。
- 6 アフリカ・中東の穀物輸入量が世界の穀物貿易量全体に占める割合は3分の1になっており、この地域は世界の穀物需給に大きな影響力を持っている。また、これらの地域の経済発展、政治・社会の安定にとって農業・食料は重要であり、日本の対アフリカ・中東援助において食料・農業分野を強化していく必要がある。

目 次

はじめに

1 アフリカ・中東の概況

(1) アフリカ

(2) 中東

2 人口と食料

(1) アフリカの人口と食料

(2) アフリカの食料におけるイモ類の重要性

(3) 中東の人口と食料

3 食料生産

(1) 農地面積

(2) 穀物生産

(3) イモ類生産

4 食料貿易

(1) 穀物輸入量

(2) イモ類の貿易

5 国別の事例

(1) ナイジェリア

(2) エジプト

(3) サウジアラビア

6 課題と展望

(1) 世界の食料需給におけるアフリカ・中東の重要性

(2) アフリカ・中東諸国における農業・食料の重要性

(3) アフリカ・中東の農業・食料に対する日本の貢献

はじめに

多くの日本人にとって、アフリカ・中東は遠い存在である。アフリカについては、野生動物、サハラ砂漠、エジプト古代文明などが多く紹介され、中東は紛争が続いている地域として認識されている。近年では、サッカー（ワールドカップ）を通じてなじみが深くなったとはいえ、アフリカ・中東地域を訪れる日本人は決して多くない。

しかし、日本は石油の9割を中東（サウジアラビア、アラブ首長国連邦、クウェート等）に依存しており、中東地域の情勢に無関心ではいけない。昨年末から続いている北アフリカ・中東における政変は、石油価格を通じて日本経済に直結する問題となっているが、今回の政変の背景の一つとして食料品価格の高騰があったこと

が指摘されている。北アフリカ・中東諸国は食料の多くを輸入に依存しており、国際的な食料品価格の高騰によってこれらの地域の庶民の生活が悪化したことが政府に対する不満として爆発した。

農林中金総合研究所は、一昨年（2009年）、『変貌する世界の穀物市場』（家の光協会）を発刊し、世界の主要地域の食料需給動向について穀物を中心に分析したが、残念ながら同書ではアフリカ・中東地域の分析が欠けていた。日本においてアフリカ・中東地域の食料需給に関する文献は乏しく、本稿は、その欠落を埋めるためアフリカ・中東地域の食料需給の全体像を示そうとするものである。

（注1）アフリカ・中東地域の食料需給構造の全体像を分析したものとして『飢餓と飽食の構造』（農文協、1990）があるが（アフリカ・中東については篠浦光が執筆）、その後、アフリカの特定の国・地域に関する詳細な調査・研究はあるものの（例えば池野旬他『アフリカの食糧問題』（ア

ジア経済研究所, 1996), 中東の食料事情に関する文献・研究は少ない。

1 アフリカ・中東の概況

アフリカ・中東の食料需給を分析する前に、アフリカ・中東がどういう地域であるかを概観しておきたい。

(1) アフリカ

a 広大な大陸と低い人口密度

アフリカの面積は3,031万km²（南米の1.7倍）であり、世界の陸地面積全体の22.2%を占め広大である。そこに住むアフリカの人口は10.3億人であり、南米（3.9億人）の2.6倍であるが、インド（面積ではアフリカの9分の1）の人口（12.1億人）より少なく、アフリカの人口密度は低い（34人/km²）。

b 多様な気候と地形

アフリカは南北に長く、赤道直下に熱帯雨林が広がるが、そこから同心円状にサバンナ、砂漠、地中海気候が広がっており、多様な自然を有している。北緯20～30度付近にサハラ砂漠があり、南緯20～30度付近にカラハリ砂漠、ナミブ砂漠がある。

アフリカは全体としては平坦な土地であるが、東部に高原（エチオピア高原等）がある。また、中央部から周辺部に向けて、ナイル川、ニジェール川、コンゴ川、ザイール川などの大河川があり、これらの河川の流域を中心に経済圏が形成されてきた。

c 異なる北アフリカとサブサハラ

アフリカ

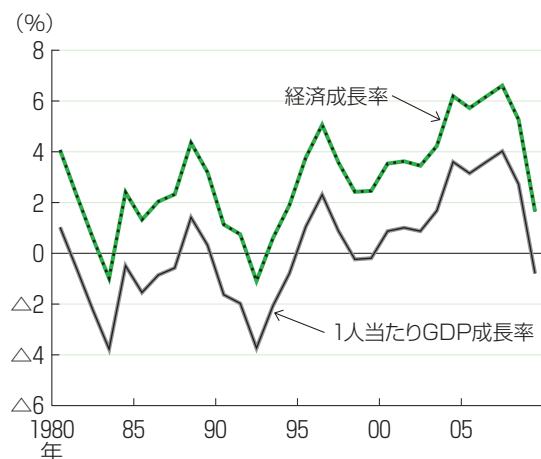
広大な面積、文化・言語の多様性、植民地時代の宗主国のちがい等によりアフリカには多くの国があり、アフリカの国数（53カ国）は世界全体の4分の1を占めている。このうち人口が5千万人以上の大国は、ナイジェリア（15.8千万人）、エチオピア（8.5千万人）、エジプト（8.4千万人）、コンゴ民主共和国（6.8千万人）、南アフリカ（5.0千万人）の5カ国であるが（この5カ国でアフリカ全体の43%を占める）、人口が1千万人未満の国も28カ国ある。

アフリカは、サハラ砂漠を境に、大きく北アフリカとサブサハラアフリカの2つの地域に分けることができ、両者は文化や食料需給構造が大きく異なっている。サハラ以北の北アフリカ（エジプト、アルジェリア等）は、イスラム教徒やアラビア語を話す人が多くおり、中東と同じグループとして論じられることが多い。一方、サハラ以南のサブサハラアフリカには黒人が多くおり、ブラックアフリカとも呼ばれている。

d 長期の停滞から回復に転じたアフリカ経済

第二次大戦後（特に1960年前後）、アフリカの国々は欧州の植民地支配から独立し、独立直後のアフリカ諸国では、国家建設の熱気もあって経済は着実に発展した。しかし、70年代における石油価格高騰と、その後の一次産品価格の下落によって、アフリカ経済は危機的状況に陥り、80年代には累

第1図 サブサハラアフリカの経済成長率



資料 World Bank WDI より筆者作成

積債務問題が大きな問題になった。その結果、アフリカの多くの国は80年代後半にIMF、世界銀行の構造調整政策を受け入れたが、90年代を通じてアフリカ経済は停滞し、サブサハラアフリカの1人当たりGDPは減少が続いた。

しかし、2000年頃より、資源価格の上昇等を背景にアフリカ経済は回復に転じ、今後、アフリカはさらなる発展が見込まれている^(注2) (第1図)。

(注2) 1980年代のアフリカの窮状については篠田豊『苦悶するアフリカ』(岩波新書, 1985)、最近のアフリカを巡る状況については「NHKスペシャル」取材班『アフリカ—資本主義最後のフロンティア』(新潮新書, 2011)が、現地の状況をよく伝えている。白戸圭一『日本人のためのアフリカ入門』(ちくま新書, 2011)では、日本人がアフリカに対して「飢餓と貧困の大陸」という先入観・思い込みを持っていることを指摘し、アフリカ観の転換を主張している。

(2) 中東

a 中東の範囲

「中東」(Middle East)とはヨーロッパから見て東にある地域であり(近い東は「近

東」、遠い東は「極東」)、「中近東」と呼ばれることもある。しかし、「中東」がどの国を含むかについては様々な論議があり、イスラム教、アラブ世界という共通項で北アフリカを中東に含めることもある。

本稿では、北アフリカはアフリカの中で説明することとし、アフガニスタン以西トルコまでの16カ国を中東の対象国とする。

中東16カ国を合わせた面積は696万km²、人口は3.2億人であり、面積ではサウジアラビア、イラン、トルコの3カ国で3分の2を占め、人口ではトルコ、イランの2カ国で5割を占めている(第1表)。

b 文明と交易

中東は人類最古の文明と言われるメソポタミア文明が生まれた地であり、古代遺跡が豊富である。ヨーロッパに広く普及したキリスト教もこの地で誕生し、ペルシャ(アケメネス朝、ササン朝)やイスラム帝国(ウマイヤ朝、アッバース朝)、オスマントルコなど、周辺を含めた広大な地域を支配した帝国も生まれ、中東地域は世界史の重要な舞台であった。

また、7世紀以降、この地で生まれたイスラム教が広い地域に伝わり、それとともにイスラム商人による交易が盛んになった。

c 石油資源と紛争の多発

今日において中東地域が重要であるのは、豊富な石油資源のためである。中東地域には世界の石油埋蔵量全体の6割があるといわれており、石油の輸出によってこの

第1表 中東諸国の概況

(単位 千km², 千人, ドル/人, 千トン, %)

	面 積	人 口	1人当たり GDP	穀物 生産量	穀物 輸入量	穀物 輸出量	穀物 自給率
トルコ	784	75,705	8,730	29,280	5,360	1,752	89.0
イラン	1,648	75,078	4,530	13,474	10,725	106	55.9
イラク	438	31,467	2,210	2,201	4,367	0	33.5
アフガニスタン	652	29,117	310	3,668	2,028	0	64.4
サウジアラビア	2,150	26,246	17,700	2,431	10,966	13	18.2
イエメン	528	24,256	1,060	714	2,854	98	20.6
シリア	185	22,505	2,410	2,685	3,135	106	47.0
イスラエル	22	7,285	25,740	199	2,894	40	6.5
ヨルダン	89	6,472	3,740	38	2,231	21	1.7
アラブ首長国連邦	84	4,707	45,615	0	2,610	872	0.0
パレスチナ	27	4,409	0	50	570	13	8.2
レバノン	15	4,255	7,970	177	856	65	18.3
クウェート	18	3,051	43,290	4	889	2	0.4
オマーン	310	2,905	17,890	16	646	122	3.0
カタール	11	1,508	69,754	8	472	5	1.6
バーレーン	0.8	807	25,420	0	134	0	0.0
計	6,962	319,773	-	54,945	50,738	3,216	53.6

資料 FAOSTAT, 共同通信社「世界年鑑」等から筆者作成

(注) 穀物データは2008年。

地域の産油国は巨額の富を手に入れている。

しかし、中東地域は石油資源を有しているがゆえに、イラン・イラク戦争、湾岸戦争などの紛争が多発しており、またアフガニスタンやパレスチナなどの紛争地帯を抱えている。

2 人口と食料

(1) アフリカの人口と食料

アフリカの人口は、1970年当時は3.7億人であったが、現在は10.3億人であり、過去40年間で2.8倍、20年間で1.6倍に増加している。この増加率は、アジア（40年で2.0倍、20年で1.3倍）や南米（40年で2.1倍、20年で1.3倍）より高い。

かつてに比べれば人口増加率は低下したものの、アフリカの人口は現在でも年率2.3%で増加しており、アフリカの人口は2050年には20.0億人となり、今後40年間の世界の人口増加数の4割はアフリカが占めると推計されている。

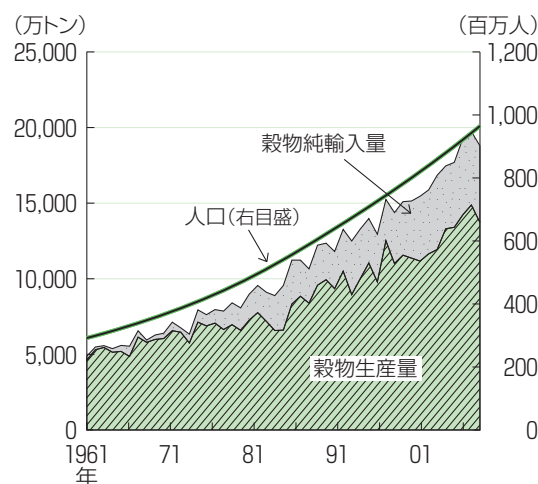
アフリカでは、人口が増加するなかで内戦や干ばつなどにより食料難がたびたび発生し、国際的な問題になってきた。^(注3) 現在でも、サブサハラアフリカには栄養不足人口が2.4億人いるとされており、この栄養不足人口の解消は大きな課題になっている。

この20年間にアフリカの穀物生産量は1.5倍に増加したが、穀物生産量の増加率は人口増加率よりも低く、また畜産が発達して飼料需要が増大したこともあり、アフリ

カの穀物輸入量は20年間で2.0倍に増加した（第2図、第3図）。

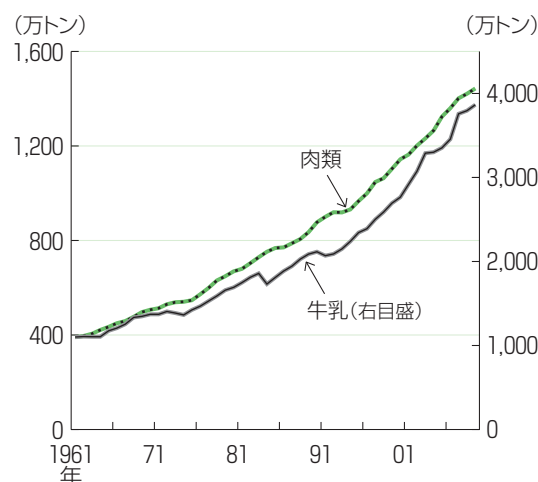
（注3）深刻な飢饉の例として、ナイジェリア（ビアフラ）（1968）、エチオピア（1984-85）、ソマリア（1992）、スーダン（1993）などがある。当時のアフリカの飢饉の実態と要因については、スーザン・ジョージ『なぜ世界の半分が飢えるのか』（1977）、NHK取材班『飢えるアフリカ』（1982）、毎日新聞外信部『アフリカ 飢えの構造』（1985）、F.M.ラッペ他『世界飢餓の構造』（1986）などがある。

第2図 アフリカの人口と穀物供給量



資料 FAOSTATのデータから筆者作成

第3図 アフリカにおける肉類・牛乳生産量



資料 第2図に同じ

（2）アフリカの食料におけるイモ類の重要性

日本にとって最も重要な食料は米であるため、日本人が食料問題を論じるときは穀物が中心になりがちであるが、アフリカ、特にサブサハラアフリカではイモ類が穀物以上に重要な食料になっている国・地域が多くある。

アフリカのイモ類生産量は2億1,644万トンであり、イモ類の生産量は穀物生産量（1億5,246万トン）より多く、また輸入（5,478万トン）を含めた穀物供給量全体（2億724万トン）よりも多い（08年）。アフリカのイモ類生産量は世界全体の3割を占めており、アフリカでは増大する人口をイモが支えてきたということもできる。

ただし、イモ類と穀物では栄養分が異なり、またイモ類は穀物より水分を多く（約7割）含むため、生産量の単純比較は問題がある。そこでイモ類に0.3をかけて穀物と比較すると、アフリカ全体ではイモ類の比重は0.24（穀物が0.76）であるが、コンゴ民主共和国（0.71）、ガーナ（0.63）、ナイジェリア（0.44）、モザンビーク（0.43）など、イモ類の比重が高い国が多くある（第2表）。

イモは、地中にあるため干ばつに強く、特にキャッサバは必要な時にいつでも掘り出すことができる。また、肥沃でない土地でも一定の収量を得ることができ、簡単な農具で栽培・収穫が可能であるため、イモ類はアフリカの食料安全保障にとって非常に重要な作物になっている。

第2表 アフリカ主要国の穀物供給量とイモ類生産量(2008)

(単位 百万人, 万トン, %)

	人口	穀物 生産量	穀物 純輸入量	穀物 供給量計	イモ類 生産量	イモ類 の比重
エジプト	84.5	2,281	926	3,207	398	0.04
アルジェリア	35.4	358	727	1,085	180	0.05
チュニジア	10.3	123	301	424	37	0.03
スーダン	43.2	527	136	663	43	0.02
エチオピア	85.0	1,301	69	1,370	611	0.12
タンザニア	45.0	623	55	678	858	0.28
モザンビーク	22.4	160	79	239	603	0.43
ケニア	40.9	286	97	383	252	0.16
ウガンダ	33.8	271	40	311	845	0.45
ナイジェリア	158.3	3,021	356	3,377	8,941	0.44
コートジボワール	21.6	147	118	265	1,006	0.53
ガーナ	24.3	185	84	269	1,495	0.63
コンゴ民主共和国	67.8	153	42	195	1,558	0.71
アンゴラ	19.0	73	62	135	1,017	0.69
南アフリカ	50.5	1,447	338	1,785	215	0.03
アフリカ計	1,033.0	15,246	5,218	20,464	21,644	0.24

資料 第2図に同じ

(注) イモ類の比重=イモ類×0.3/(穀物+イモ類×0.3)

(注4) 例えば、森島賢編『世界は飢えるか』(農文協, 1995)では、アフリカの食料問題を穀物のみで論じており、平野克己『アフリカ農業の国際比較』(『アフリカ比較研究』2001)、北川勝彦・高橋基樹編著『アフリカ経済論』(ミネルヴァ書房, 2004)、平野克己『アフリカ問題』(日本評論社, 2009)でも、サブサハラアフリカの農業問題を穀物を中心に論じている。

(注5) 篠浦光『停滞する食糧生産・アフリカ』(『飢餓と飽食の構造』第4章, 1990)での換算方法。

(注6) 国際農林業協力・交流協会編『アフリカのイモ類—キャッサバ・ヤムイモ—』(2006)、F.I. Nweke et al.『The Cassava Transformation』(2002)。

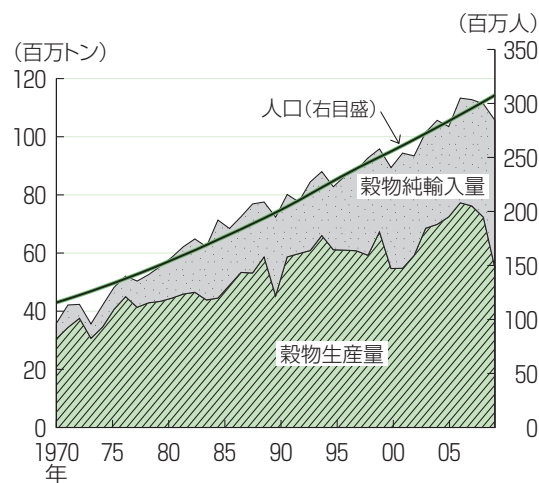
(3) 中東の人口と食料

中東地域の人口は3.2億人であり、40年間で2.8倍、20年間で1.6倍に増加した。過去20年間の人口増加を国別にみると、クウェート(3.2倍)、アラブ首長国連邦(2.5倍)などの産油国の人口増加が著しく、これは建設ブーム等によりインドなどから出稼ぎ

者が多く流入したためである。

中東地域の穀物生産量は5,495万トンで増加傾向にあるが、穀物生産の増加が人口増加に追いつかないため、中東では穀物を5,074万トン輸入している(08年)(第4図)。

第4図 中東地域の人口と穀物供給量



資料 第2図に同じ

中東全体での穀物自給率は53.6%であるが、サウジアラビア（18.2%）、アラブ首長国連邦（0.0%）、クウェート（0.4%）など産油国の自給率は非常に低い（前掲第1表）。

3 食料生産

(1) 農地面積

a アフリカ

アフリカの耕地面積は22,280万haであり、総面積に占める割合は7.5%と低い。アフリカにおいて耕地面積比率が低い理由は、人口密度が低いこと、砂漠や熱帯雨林など耕地に適しない土地が多くあること、灌漑が発達しておらずサバンナ地域に農地が少ないこと等である（そのために野生動物が生息してきたともいえる）。

アフリカの耕地面積は人口増加に対応して増加傾向にあり、過去20年間で4,700万ha（26%）増加したが、その一方で、アフリカではこの間に森林面積が6,800万ha（△9%）減少している。

アフリカでは移動耕作（焼畑農業）が広く行われており、粗放的な農業が営まれてきた。また、アフリカではほとんどが小農であり、農地の所有権は共同所有となっているものが多く、明確な所有権が確立していない地域もかなりある。

b 中東

中東地域の耕地面積は6,185万haであり、総面積の17.6%を占めている。このうちトルコが2,156万ha、イランが1,704万haであ

り、この2国で中東の耕地面積の6割を占めている。中東の耕地面積は、近年ほとんど増加していない。

アラビア半島には砂漠が多くあり、耕地はオアシスや灌漑可能な地域に限られるため、中東の耕地面積比率は低い。

(2) 穀物生産

a アフリカ

アフリカの穀物生産量（152百万トン）は、人口が同程度のインド（267百万トン）や中国（480百万トン）より少なく、米国（人口はアフリカの3分の1以下）の穀物生産量（480百万トン）の3割に過ぎない。

アフリカの穀物生産量は、40年間で2.6倍、20年間で1.5倍に増加しているが、生産量の増大は収穫面積（作付面積）の増大による要因のほうが大きく、20年間の単収の増加は1.2倍であり、収穫面積の増加は1.4倍である。アフリカでは、多くの地域で間作・混作が行われており、また肥料や農薬の投入量が少ないため、単収が非常に低い。

アフリカで生産している穀物は、トウモロコシ（5,320万トン）、ソルガム（2,519万トン）、米（2,318万トン）、小麦（2,113万トン）、ミレット（2,013万トン）であり、トウモロコシの割合が最も高い。

主な生産国は、トウモロコシは南アフリカ、ナイジェリア、エジプト、ソルガムはナイジェリア、スーダン、米はエジプト、ナイジェリア、マダガスカル、小麦はエジプト、モロッコ、エチオピアである。

b 中東

中東の穀物生産量（08年, 5,495万トン）は、40年間で1.7倍に増大したが、穀物の収穫面積はほとんど増加しておらず、生産量の増大は単収の増加によるものである。ただし、中東の穀物生産量は年による変動が激しい。^{（注7）}

穀物の生産量が最も大きいのはトルコ（2,928万トン）であり、次いでイランの1,348万トンで、この2国で中東全体の76%を占めている。

生産品目は、小麦が最大（3,419万トン）で6割を占め、次いで大麦858万トン、トウモロコシ725万トン、米380万トンである。

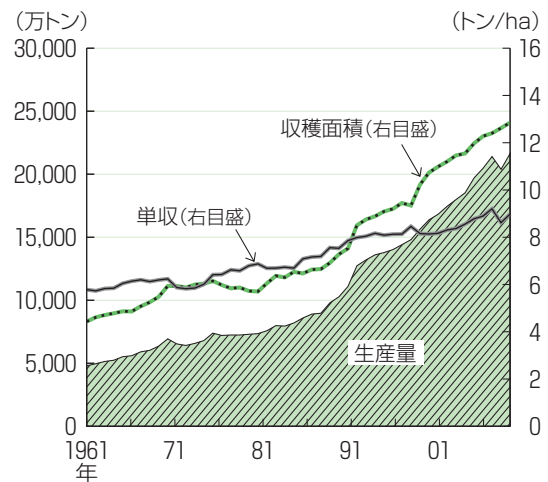
（注7）例えば、07年の穀物生産量は7,236万トンであったが、08年はイラン、シリア、アフガニスタン、イラクの不作で5,495万トンに落ち込み、09年は7,177万トンに回復している。

（3）イモ類生産

既に説明した通り、アフリカでは大量のイモ類が生産されている。世界的にはイモ類のうちジャガイモの割合が43.1%と最も大きいですが、アフリカではキャッサバが最大で54.5%を占めており、次いでヤムイモ23.0%、ジャガイモ9.0%、サツマイモ6.5%、タロイモ4.3%である。

アフリカのイモ類生産量は、40年間で3.6倍、20年間で2.2倍になっており、穀物生産量の増加率や人口増加率よりも高い。種類別に20年間の変化をみると、キャッサバ1.9倍、ヤムイモ3.2倍、タロイモ3.1倍、サツマイモ2.3倍、ジャガイモ2.7倍であり、キャッサバよりも他のイモの増加率が高い

第5図 アフリカのイモ類生産量推移



資料 第2図に同じ

ことが注目される。

過去20年間ににおけるイモ類の単収の増加は1.2倍、収穫面積の増加は1.9倍であり、アフリカにおけるイモ類の生産量の増加は、単収より収穫面積の増加要因のほうが大きい（第5図）。

最大のイモ類生産国はナイジェリア（8,941万トン）であり、ナイジェリアのみでアフリカ全体の41%を占めている（08年）。そのほか、コンゴ民主共和国、ガーナ、アンゴラ、タンザニアなどの生産量が多い。アフリカでは、イモ類は主に食用（自家消費）であり、飼料用、加工用は少ない。

4 食料貿易

（1）穀物輸入量

a アフリカ

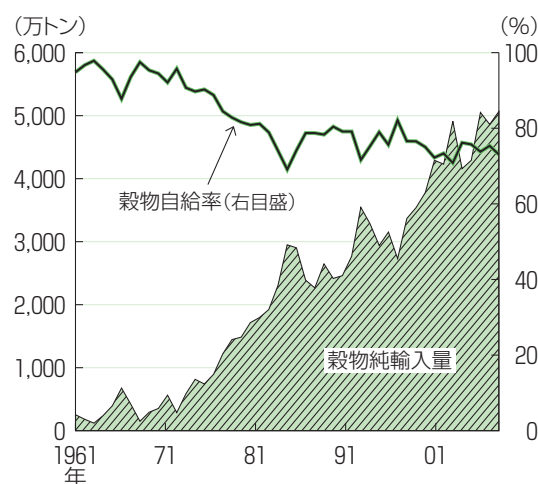
穀物の生産量増加が人口増加に追いついていないこと、飼料需要の増大、都市化の進展等により、アフリカの穀物輸入量は大

大きく増大し、08年の穀物輸入量は5,478万トンで、40年間で8.1倍、20年間で2.0倍になっている（第6図）。

輸入している穀物は小麦3,169万トン、トウモロコシ1,157万トン、米683万トンであり、主な穀物輸入国はエジプト、アルジェリア、モロッコ、チュニジア、リビア、南アフリカで、北アフリカが輸入量の6割を占めている。

アフリカの穀物輸入量が世界の穀物貿易量全体に占める割合は17.3%になっており、小麦については24.7%、米については22.1%をアフリカが占めている。

第6図 アフリカの穀物純輸入量推移



資料 第2図に同じ

b 中東

中東地域では穀物に適した耕地が不足しているため、穀物の多くを輸入に依存している。08年における穀物輸入量は5,074万トンであり、40年前に比べて16.1倍、20年間で2.7倍に増加している（第7図）。

中東地域が輸入している穀物は、小麦

1,970千トン、大麦1,265千トン、トウモロコシ966千トン、米569千トンであり、主な輸入国はサウジアラビア1,097千トン、イラン1,073千トン、トルコ536千トン、イラク437千トンである。

中東の穀物輸入量が世界の穀物貿易量全体に占める割合は16.1%になっており、小麦については15.4%、米については28.5%を中東が占めている。

第7図 中東の穀物純輸入量推移



資料 第2図に同じ

(2) イモ類の貿易

イモ類は生のままでは保存期間が短いため、生のイモはほとんど貿易の対象にはなっておらず、貿易されるのは主に加工品（でんぷん、チップ等）である。しかし、アフリカではイモ類は主として自給用であり、貿易される割合はごくわずかである。

キャッサバの貿易についてみると、アフリカのキャッサバ輸出量（生イモ換算）は、ピーク時の68年には466千トンあったが、08年には51千トンまで減少している。

一方、アフリカのキャッサバ輸入量は173千トン（生イモ換算、08年）であり、輸出量より多いが、輸入の大部分はキャッサバでんぷんである。アフリカで最大のでんぷん輸入国は南アフリカであり、南アフリカのみでアフリカ全体の8割を占めている。^(注8)

(注8) なお、アフリカは伝統的にカカオ、コーヒー、綿花、砂糖、ごま、パームオイル、落花生などの農産物を輸出しており、一部の国ではこれらの品目の輸出が経済にとって非常に重要になっているが、本稿では説明を省略する。

5 国別の事例

以上、アフリカ、中東の食料需給の全体像を概観したが、次に、サブサハラアフリカ、北アフリカ、中東を代表する3つの国（ナイジェリア、エジプト、サウジアラビア）について、食料需給をみてみたい。

(1) ナイジェリア

ナイジェリアはアフリカ最大の人口を有する国であり、面積は91万km²（日本の2.4倍）で、人口は1億6千万人（日本の1.3倍）である。アフリカ最大の産油国であるが、貧困率が高い（1日1.25ドル以下で暮らす人口割合は64.4%である）。

09年の穀物生産量は21百万トン（トウモロコシ7百万トン、ソルガム5百万トン、ミレット5百万トン）であり、アフリカでは穀物の生産量が最も多い国であるが、国内で生産量が不足している小麦、米などの穀物を輸入している。穀物輸入量は、豊作であった08年は1.3百万トンのみであったが、

第8図 ナイジェリアの人口と穀物供給量



資料 第2図に同じ

07年は9.1百万トンであり、穀物輸入量は増加してきた（第8図）。

ナイジェリアはアフリカ最大のイモ類生産国であり、イモ類の生産量（09年）は74百万トンで（うちキャッサバ37百万トン、ヤマイモ27百万トン、タロイモ4百万トン）、イモ類の生産量は収穫面積の増大により大きく増大してきた。

ナイジェリアはかつてビアフラ戦争により混乱状態にあり、現在でも政治を巡る紛争がたびたび発生しているが、食料を巡る状況は改善してきている。ナイジェリアには、アフリカにおけるイモ類研究の拠点である国際熱帯農業研究所があり、ナイジェリア政府はキャッサバ産業の発展に取り組んでいる。

(2) エジプト

「エジプトはナイルの賜物」という言葉があるが、エジプトはナイル川の水を利用した農業が盛んである。国土（99万km²）の

の大半は砂漠であるが、ナイル川流域と河口デルタに豊かな農地が広がり、北アフリカ最大の人口（8.4千万人）を有している。

穀物の生産量は24百万トンであり、その内訳は、小麦8.5百万トン、米7.7百万トン、トウモロコシ6.6百万トンである。小麦、米ともアフリカ最大の生産量であり、特に米（粳）の単収（9.8トン/ha）は日本（6.8トン/ha）より高い。

穀物の生産量は2000年頃まで増加を続けてきたが、最近10年間は収穫面積、単収とも頭打ちの状態であり、生産量はわずかな増加にとどまっている。

しかし、人口増加と飼料需要の増大のため、エジプトは穀物を多く輸入しており、08年の穀物輸入量は12百万トン（小麦8百万トン、とうもろこし4百万トン）になっている（第9図）。

エジプトは、かつて社会主義的政策を採用していた時代もあり、市場経済を導入した今日でも貧困者に対する食料支援制度を

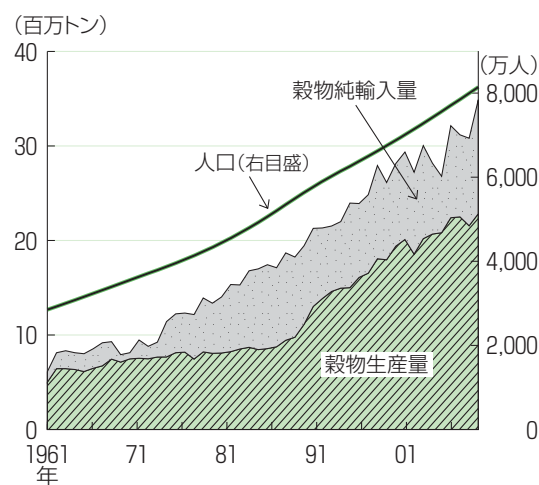
設けている。しかし、エジプトは国内で必要とする小麦の半分を輸入に依存しているため、国際穀物価格の高騰による食料品価格の上昇が国民の生活を直撃し、そのことが昨年来の政変の背後にあったことが指摘されている。

（3）サウジアラビア

サウジアラビアは、面積は215万km²（日本の5.7倍）で中東で最大であるが、砂漠が多いため人口は26百万人（日本の2割）である。産油国であるため所得水準が高く、出稼ぎ者の流入もあってサウジアラビアの人口は大きく増大し、首都リヤドは人口5百万人の大都市になっている。

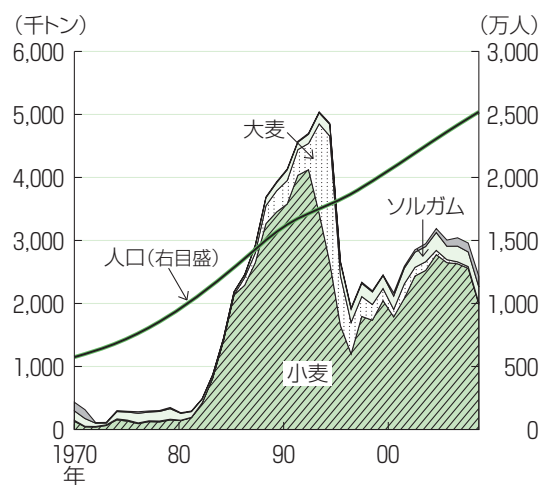
サウジアラビアでは、オアシスでデーツ（なつめやし）の栽培が盛んであり、遊牧民による牧畜も行われてきたが、耕地に乏しかったためかつては穀物生産はごくわずかにとどまっていた。しかし、サウジアラビアは、80年頃から地下水を利用した灌漑に

第9図 エジプトの人口と穀物供給量



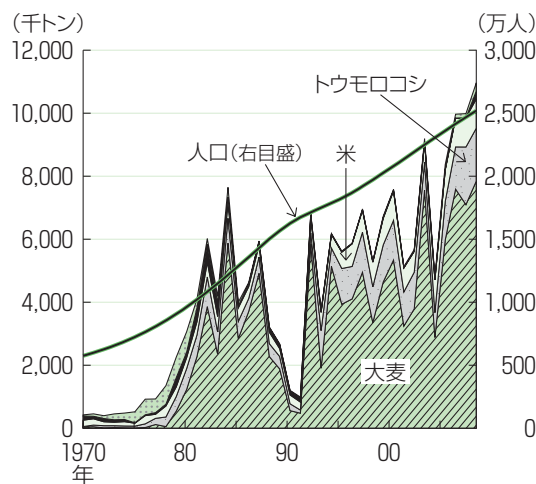
資料 第2図に同じ

第10図 サウジアラビアの穀物生産量



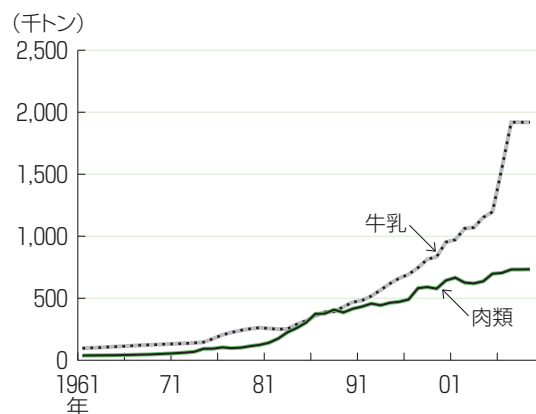
資料 第2図に同じ

第11図 サウジアラビアの穀物輸入量



資料 第2図に同じ

第12図 サウジアラビアの牛乳・肉類生産量



資料 第2図に同じ

よって砂漠を小麦畑とすることを始め、ピーク時の93年には穀物生産量は504万トン（113万ha）に達し、一時は周辺諸国に穀物を輸出（88年に207万トン）するまでになった（第10図）。

しかし、地下水のくみ上げによって水資源の枯渇が懸念されるようになり、サウジアラビア政府は2008年に、2016年までに段階的に小麦生産をやめることを決定した。現在の穀物生産量は140万トン（小麦100万トン、ソルガム21万トン、トウモロコシ16万

トン）であるが、5年後にはこれがほとんどなくなる見込みである。そのため、サウジアラビア政府は、必要な食料を確保するため投資会社を設立して海外の農地を買収することを計画し、これが世界的なランドラッシュの引き金になった。

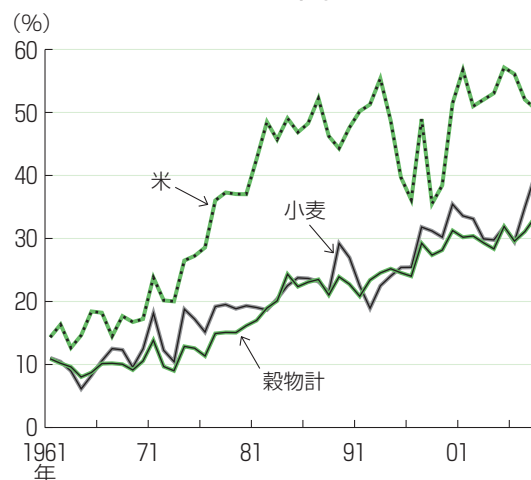
一方、サウジアラビアは畜産の振興にも力を入れており、飼料用の大麦を中心に穀物を11百万トン輸入している（大麦785万トン、トウモロコシ168万トン、米93万トン）（第11図、第12図）。

6 課題と展望

(1) 世界の食料需給におけるアフリカ・中東の重要性

以上見てきたように、アフリカ・中東の穀物輸入量は大きく増大し、この両地域の穀物輸入量が世界の穀物貿易量に占める割合は33.4%になっており（特に米は50.6%、小麦は40.1%を占める）、アフリカ・中東を抜きに世界の穀物需給を論ずることはでき

第13図 世界の穀物輸入量に占めるアフリカ・中東のシェア



資料 第2図に同じ

なくなっている（第13図）。

アフリカの人口は今後さらに増大する見込みであり、アフリカの国々にとって増大する食料需要をどうまかなっていくかは非常に大きな課題である。また、中東地域は必要とする食料の多くを輸入に依存しており、サウジアラビアの小麦生産中止決定がランドラッシュの引き金になったように、この地域の食料需給が世界に与える影響は大きく、アフリカ・中東地域の食料事情を把握しておくことは世界の食料需給を考える上で重要である。

なお、トルコはEU加盟をめざして加盟交渉を行っているが、トルコは人口、穀物生産量が大きいこともあり、EU加盟交渉は難航している。また、EUは北アフリカ諸国とFTAを締結しており、さらにACP諸国（その多くはアフリカ）ともFTA交渉を続けており、EUの食料政策を考える上でも中東・アフリカ地域の動向は重要である。

(2) アフリカ・中東諸国における農業・食料の重要性

周辺地域や世界の食料需給に対する影響とともに、アフリカ・中東地域の農業・食料は、これらの地域自体の政治的安定や経済発展という観点からも重要である。

昨年末以降の北アフリカ・中東諸国での政変の要因として食料品価格の高騰が指摘されており、今後も、アフリカ・中東地域の国々にとって国民が必要とする食料をどう安定的に確保していくかは、政治・社会の安定のため不可欠の課題である。

農業は経済発展の基礎であり、農業の生産性向上が工業化に必要な余剰労働力を生み出すし、また農業の発展は物価安定、内需拡大、政治・社会の安定などの効果をもたらすため、アフリカの経済発展のために農業を重視していく必要がある。^(注9)

(注9) 平野克己「アフリカの農業とリカードの罠」(『アフリカ問題』第3章)、峯陽一『現代アフリカと開発経済学』参照。

(3) アフリカ・中東の農業・食料に対する日本の貢献

日本は、1993年から開始したTICAD (Tokyo International Conference on African Development: アフリカ開発会議) 等を通じてアフリカ重視の方針を打ち出しており、そのなかでアフリカに対する農業援助も強化している。

しかし、これまでの対アフリカ農業援助(ODA)は、日本の得意分野であるコメ、灌漑が中心であり、サブサハラアフリカの農業・食料全体に対する認識がやや弱かったと思われる。サブサハラアフリカの食料においてイモ類が重要であり、今後の対アフリカ援助においてイモ類を正當に位置付けていく必要がある。特に、日本はモザンビークにおいてブラジルと共同でアフリカ熱帯サバンナ農業開発事業(プロサバンナ)を開始したが、この事業の対象地域(ナンブラ州)はキャッサバの主産地であり、同事業にキャッサバのプログラムを含める必要がある。

なお、途上国の農業開発に際し、農産物の商品化、輸出品目化を目的に大規模な農

業投資や企業的農業を進めがちであるが、アフリカの農村では小農が主であり、多くの農民が自給的食料の生産に従事していることを理解する必要がある。過去のアフリカ社会主義の失敗やIMF・世界銀行の構造調整政策によって、アフリカでは協同組合の組織化に関して否定的な見解を持っている国もあるが、協同組合の組織化による農業の発展は地域全体を引き上げる方法として有効であり、その点で日本の戦後の経験は生かせるであろう。

日本の農業・協同組合関係者はこれまでIDACA（アジア農業協同組合振興機関）等を通じて東南アジアやインドとの交流を多く続けてきたが、アフリカ・中東の国際社会における影響力はますます強まる見込み

であり、今後、アフリカや中東諸国との関係を深めていく必要があるだろう。

<参考文献>

- ・峯陽一（1999）『現代アフリカと開発経済学』日本評論社
- ・平野克己編（2003）『アフリカ経済学宣言』アジア経済研究所
- ・北川勝彦・高橋基樹編著（2004）『アフリカ経済論』ミネルヴァ書房
- ・平野克己（2009）『アフリカ問題』日本評論社
- ・櫻井武司・Irene.K.Ndiva（2008）「カントリーレポート：サブサハラ・アフリカー経済自由化政策下の食料安全保障－」農林水産政策研究所『平成19年度カントリーレポート インド、サブサハラ・アフリカ』
- ・島敏夫（2009）「GCC諸国の農業・貿易政策」農林水産省「主要国の農業情報調査分析報告書（平成20年度）」

（しみず てつろう）

発刊のお知らせ

農林漁業金融統計2010

A4判, 160頁
頒価 2,000円(税込)

農林漁業系統金融に直接かかわる統計のほか、農林漁業に関する基礎統計も収録。全項目英訳付き。

<頒布取扱方法>

編集…株式会社農林中金総合研究所
〒101-0047 東京都千代田区内神田1-1-12 TEL 03(3233)7744
FAX 03(3233)7794

発行…農林中央金庫
〒100-8420 東京都千代田区有楽町1-13-2

頒布取扱…株式会社えいらく営業第一部
〒101-0021 東京都千代田区外神田1-16-8 TEL 03(5295)7580
FAX 03(5295)1916

<発行> 2011年2月